

## 新学習指導要領に基づく中学校英語教科書について

大東 真理

### Classroom Activities Using English Textbooks under the 2002 Revision

DAITO Mari

(Abstract)

This paper deals with language activities in authorized English textbooks written for students of junior high schools. In 1998, the Course of Study specifying the content of English teaching was revised, and newly authorized textbooks are used in junior high schools starting from 2002.

The focus of study is on the arrangement of exercises in the newly revised edition. This is based on the assumption that exercises reflect what is actually practiced as language activities in the classroom. By comparing the exercises with those from the former edition of the same textbook series, changes brought about by the revision regarding language activities are made clear.

#### 1. はじめに

新しい学習指導要領（以下指導要領）が平成14年度から中学校、平成15年度から高等学校で実施されることにともない、選択教科として扱われていた外国語は必修教科となった。今回の改訂で教科の目標として特に重視されているのは、英語を実際に使用して聞いたり話したりする、実践的コミュニケーション

能力の育成である。

本稿は、英語学習の初歩の段階における実践的コミュニケーション能力の育成について、教材研究の視点から考えることを目的とする。材料とするのは、新しく改訂された中学英語教科書である。その中で、実践的コミュニケーションに関連する部分として、言語活動を分析の対象とする。指導要領における言語活動(language activities)とは、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」であって、その内容は、音声や文型の練習などの学習活動(learning activities)や、実際の言語の使用に近いコミュニケーション主体の活動(communicative activities)とも関連する、総合的な活動であると解釈することができる。これは Nunan(1989)の言う、“the macroskills of listening, speaking, reading, and writing”に相当すると考えられる。

したがって、対象となる言語活動は、各単元の中で扱う練習問題と、単元とは独立した形でタスク活動<sup>1</sup>を行わせる部分の全てを含む。使用する教科書は、東京書籍の中学1年から3年用 *New Horizon English Course 1, 2, 3*の改訂版(以下改訂版)である。また、改訂前の旧版(以下旧版)との比較も一部行う。

## 2. 新指導要領に示された「言語活動の使用場面」と「言語の働き」

新指導要領において、実践的コミュニケーション能力の育成が強調されたこと背景には、中学校の英語授業の中で、実際に英語を使用してコミュニケーションを行う練習、すなわち言語活動の位置づけが、英語学習の初級段階であるということから、文法構造の定着という補助的役割にとどまっていたことへの反省があると思われる。

このような経緯から、今回の改訂では、これまで学年ごとに指定していた言語活動の内容を、3学年間を通したものに一括している。そのため、「言語活動の取り扱い」を新たに設け、言語活動を指導する上で3学年間を通して配慮すべき事項を示している。その中で、実際に英語を使って言語活動を行うときに配慮すべき事項<sup>2</sup>として、「言語の使用場面」と「言語の働き」を取り上げ、

次のような具体例を挙げている。まず「言語の使用場面」として示されたのは、「あいさつ」「自己紹介」「電話での応答」など。そして「言語の働き」としては、「説明する」「質問する」「依頼する」「礼を言う」などである。

### 3. 言語活動とコミュニケーション能力

コミュニケーション能力を理論的に整理した枠組みとしては、Savignon(1983)の所説がある。この枠組みに拠るコミュニケーション能力の4つの構成要素である文法的能力(grammatical competence)、社会言語学的能力(sociolinguistic competence)、談話能力(discourse competence)、方略的能力(strategic competence)のうち、指導要領に示された言語活動の「場面」もしくは「機能(働き)」と関連するのは、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力の3つであると言える。なぜなら、文法的能力が、意識的に学習した文法の知識を内在化する言語的能力だとすると、あとの3つは、獲得した言語的能力を、実際の社会的場面においてある機能を果たすように適切に使用する運用能力である、と解釈できるからである。

以上のような観点が、教科書の編成にどのように反映されているかを知る方法として、シラバス<sup>3</sup>がある。一般にシラバスとは、一つの教育プログラムの学習内容が何を中心に編成されているかを学習目的または学習方法の体系的なリストによって示すものである。中学校の教科書は多くの場合、初めて英語を学習することを考慮して、特に第1学年用は一定の順序で文法事項が提示される文法シラバス(structural syllabus)を基本としている。実際に旧版の *New Horizon English Course 1* を見ると、各単元は文法事項を基本とした配列であり、本文(またはモデル文)と呼ばれる英文に続く文法的なドリルを使って、その単元で学習する文法項目の理解と定着を図ることが練習問題の主な役割となっている。

一方、改訂版(事例では平成10年度版<sup>4</sup>)においては、新指導要領に沿って、実践的な言語活動を初歩の学習段階から行わせるために、コミュニケーション主体の活動を第1学年から設定する必要がある。ここで求められるのは、文法

の学習を中心にしながら、習得した文法構造を場面の中で使うことで、言語の機能も学習して行く仕組みである。

この考えに立って、本稿では言語的能力の獲得にかかわる部分と、学習した内容を実際の場面で運用する能力を引き出す部分とが、どのように関係しているかということを中心に改訂版の分析にあたる。その枠組みとして、Nunan(1989)の「練習問題の段階的配列」(graded sequence of exercises)を用いることとする。

#### 4. 理論的枠組み

Nunan(1989)(p. 96)によると、シラバスの立案には三つの基本概念があり、それらは grading と sequencing と integrating である。Grading とは、ある教科書で扱う内容を、学習者の負荷を考慮して段階的に配列することである。これにより、初級の生徒に対しても、インプットを簡略化し過ぎることなく練習問題を行わせることができる、としている。

以下に、段階的配列(graded sequence)による活動例を引用する。<sup>5</sup> 段階的配列とは、基礎的言語活動から創造的言語活動へと練習問題の内容が連続的に展開することを指している。

##### A. *Processing* (comprehending)

1. Read or listen to a text – no overt response.
2. Read or listen to a text and give a non-verbal, physical response (e.g. learner raises hand every time key words are heard).
3. Read or listen to a text and give a non-physical, non-verbal response (e.g. tick a box or grid each time key words are heard).
4. Read or listen to a text and give a verbal response (repeat or write key words when they are heard).

##### B. *Productive*

5. Listen to cue utterances, dialogue fragments and repeat.
6. Listen to a cue and complete a substitution or transformational

drill.

7. Listen to a cue (e.g. a question) and give a meaningful response (i.e. one that is true for the learner).

C. *Interactive*

8. Simulation (e.g. having listened to a conversation in which people talk about their own family, students, working from role cards, circulate and find other members of their family).
9. Discussion (e.g. students in small groups talk about their own families).
10. Problem solving (e.g. in an information gap task, students are split into three groups; each group listens to an incomplete description of a family; students recombine and have to complete a family tree, identify which picture from a number of alternatives represents the family, etc.).

この例が表すように、Aの段階からCの段階へと連続する練習問題の各項目は、前の項目で獲得または練習した技能(skill)を、後に続く項目を遂行する際に活用し、発展させるように立案され、全体として異なるタイプの言語活動のつながり(sequence)となっている。

個々の内容を見ると、まずAの段階で、ドリルや個々の言語項目についての理解を中心とした基礎的言語活動を行う。Bの段階では、既に獲得した技能を活用しながら、よりまとまった言語産出へと発展させる。そしてCの段階になって、ディスカッションや問題解決などのような、ある目的をもって一連の活動を行いながら幾つもの技能を組み合わせる行うタスク活動に取り組む。

このような段階的連続性に配慮した練習問題の配列が、改訂版の教科書にはどのように表れているかを、以下に検討して行く。

## 5. 場面を設定した言語活動

授業の中で英語を実際に使用し、目的をもった言語活動を経験させる場合、一つの場面 (situational context) を設定し、その場面に関連するタスク活動を行わせる。改訂で、これまで学年ごとに学習する内容を規定していた「学年指定」が言語材料、言語活動ともに外れたことにより、従来は文型練習など文法事項の確認に重点を置いたドリルが中心であった第1学年用の教科書にも、ペアまたは複数の相手との英語によるやりとりを行わせる発展的な活動がまとまった形で織り込まれる傾向が見られる。事例1は改訂版の「自己紹介をしよう」という活動である。

### 事例1 「自己紹介をしよう」

言語活動：自己紹介（話題を選んで書く、英語で自己紹介をする）

場面設定：あなたの学校に新しく外国からやってきた先生に、簡単に自己紹介をしてみよう。

練習問題：

Step 1 話題を選ぼう（メモを作る）

スポーツ、教科、楽器、などの中から話題を選び、内容を考える。

Step 2 モデルを読もう（英文の自己紹介を読んで理解する）

I'm Asano Emi. I like English very much. It's interesting.  
I don't like math.

---

My name is Matsui Jun. I like table tennis. I play table tennis after school.

Step 3 自己紹介を書き、発表してみよう。

Step 1 のメモをもとに、Step 2 のモデルを参考にして自己紹介の英文を書き、発表してみよう。

(例) I'm Sato Sayaka. I like music. I play the piano. Do you play the piano?

(NEW HORIZON English Course 1. 平成10年度版. 東京書籍)

生徒はこの事例より前の単元で既に、I'm \_\_\_\_\_. I'm from \_\_\_\_\_. I like swimming. I play the flute. などの表現を学習し、文型練習を行っている。その際、スポーツ名や教科名に関する語彙も新出単語として紹介される。従って、ここでの言語活動は前の単元で何度か学習した構造を実際に使って、自分で決めた内容を英語で伝える練習という意味を持っている。

1年生の早い段階からこのような言語活動を行うことができるように、言語材料の面でも、旧版と比較して新出語数の割合が2、3年次に比べて1年次に重点的に配分されている。すなわち、1年生で新しく習う単語数は3年間で習う総単語数に対して、旧版の約36%から新版では47%に増加し、3学年間を通して最も高い割合となっている（各巻末の Word List を参照して算出）。さらに練習問題の配列を見ると、Step 1 と Step 2 を土台にして、より創造的な Step 3 につなげているところに、基礎的ドリルから創造的活動への段階的配列が認められる。

## 6. 機能を中心とした言語活動

言語を使用して何を伝達することができるのか、ということを中心に考えられているシラバスを、概念・機能シラバスと言う。このタイプのシラバスでは、ある事柄について説明したり質問したりする時にはどうするか、というコミュニケーションの目的を中心に、学習項目を選択する。従って、まず伝達したい内容があり、そのために必要な機能と、関連する語彙や文法を取り上げることになる。新指導要領に示された「言語の働き」に配慮した言語活動は、この考

え方に沿ったものであることが分かる。

言語の働きに配慮した言語活動をシラバスの中に取り入れる場合、学習段階との関係が問題となる。指導要領に沿った形で進められる学校の英語授業では、入門期においては、文法・語彙などの言語形式の理解と定着に重点を置き、上級に進むにつれて、機能を中心とした活動、すなわち、特定の目的のために必要なあらゆる語彙と構造を選んで用いる、伝達重視型の言語運用を取り入れるような展開を目標として来た。このことは教科書編成にも反映されている。例えば、同じ単元に含まれる複数の練習問題について、文法的関連性とトピックまたは目的志向の関連性のどちらに重点が置かれているかという観点で旧版と改訂版を比較すると、旧版では、個々の練習問題の間に、学習する文法事項の共通性はあるが、トピックの関連性が見られないケースが多いことが分かる。これに対して改訂版では、文法事項に重点を置きながらも、トピックの関連性や活動の連続性が考えられているケースが多くなっている。事例2は、改訂版の「生活パターンを話す」という活動である。

## 事例2 「生活パターンを話す」

言語活動：①自分の一日の生活について話す。

②友達にインタビューを行い、その内容を書いて発表する。

練習問題：

Step 1 由美が自分の一日の生活について話します（モデル文の理解）

I get up at seven. I leave home at seven fifty. I walk to school. ... I play softball after school. ... I go to bed at about eleven.

Step 2 由美の例にならって、あなたの一日について言ってみよう。

Step 3 友達に尋ねよう



ペアになり、次の3つの文を使って尋ねあい、下の表に記入しよう。

What time do you get up?

How do you come to school?

What do you do after school?

友達の名前	起床時間	通学手段	放課後

Option 友達について発表しよう

Step 3 の表をもとに、友達の日について3つの文を書いて発表しよう。

(例) Koji gets up at seven thirty. He comes to school by bus. He plays basketball after school.

(NEW HORIZON English Course 1. 平成10年度版. 東京書籍)

この事例の Step 2、Step 3、Option によって、生徒はお互いに未知の情報を伝え合い、得られた結果を報告するための英文を書き、それを口頭で発表する、という一連の活動を段階的に行う。

## 7. 文法的要素と機能的要素の取り扱い

前節の事例2 Step 3 で用いる三種類の質問表現は、直前の単元で学習する三つの場面の基本文型にそれぞれ対応し、全体で一つのまとまった部分(segment)としての連続性を持っている。事例3はこの単元の内容と言語活動の概略である。

### 事例3 連続性を持つ言語活動の配列

場面 1 : 世界各地のリレー中継を聞く

モデル文 :

What time is it in Sydney now? — It's one in the afternoon.

How's the weather? — It's sunny.

練習問題 : ①時刻を尋ねる/答える対話練習。

②中継を聞いて、世界各都市の時刻と天候を書き込み、表を完成させる。

---

場面 2 : ホームページを見て

モデル文 :

Hello. Welcome to our school. I'm Ben.

— Who's Ben?

— He's an old friend.

練習問題 : ①「だれ」と尋ねる文型中心の対話練習。

②色々な職業の人を話題にして文型中心の対話練習。(Do you like Ichiro? — Who's Ichiro? — He's a baseball player.)

---

場面 3 : ホームページへの質問に答える

モデル文 :

How many classes do you have each day? — We have six each day from Monday to Friday.

How long are the classes? — They're fifty minutes long.

...

What do you do after school? — Some students play sports.

練習問題：①生徒自身ならどのような質問をしたいか考えさせる。

②生徒自身が “What do you do after school?” と尋ねられたら、どのように答えるか、考えさせる。

(*NEW HORIZON English Course 1*. 平成10年度版, 東京書籍)

場面1から場面3の練習問題を見ると、場面1と2の What time...? と Who is...? は新出表現で、文型練習に重点が置かれている。これに対し、How を使った疑問文は二つ前の単元で How many comic books do you have? として既に導入されている。そこで、この単元ではさらに二種類の場面を用意し、How の多様な表現を紹介している。場面1の How's the weather? という表現を使った表完成の活動と、場面3の How many classes do you have each day? / How long are the classes? を使った、ホームページでアメリカの中学校の様子を尋ねる活動が、これに相当する。また、場面3の活動は、生徒に対してインターネットでアメリカの友人にどのような質問をしたいかを考えさせる、初歩的な open-ended task (到達点が一つに限定されないタスク活動) になっている。

ここでは、ある学習項目(How...)を中心とした言語活動が学習段階を追って何度も登場する場合、その内容がしだいに深められるような構成となっていることが分かる。このように、同じ学習項目を繰り返し取り上げながら上級レベルへとつなげて行く方法は、Widdowson & Brumfit(1981)の所説に沿うものであると言える。彼らが提唱したのは、文法の学習を中心にしながら、習得した文法構造を場面の中で使うことで言語の機能も学習する方法で、二種類の学習項目を螺旋状に編成することから、いわゆるスパイラル方式と呼ばれるモデルである。

次に、機能の学習についてはどうであろうか。改訂版の第1学年から第3学年用の教科書を通して見ると、「言語の使用場面」や「言語の働き」の取り扱い

いは、第1学年でまず一通り学習する。そして第2、第3学年で2回目、3回目と繰り返し学習する構成となっている。この時、学年が進むにつれてより複雑な活動を行うようになる場合と、必ずしもそうでない場合とがある。例えば「道案内をする」では、学年を追って表現の幅は少しずつ広がるが、活動の複雑性は変わらない。使う表現は、各学年とも次のような対話形式の Speaking 活動である。

Excuse me. Which bus goes to City Hall? — City Hall? Take bus No.3. (第1学年) Excuse me. Could you tell me the way to the post office? — Sure. Go down this street and turn right at the second traffic light. (第2学年) Could you tell me how to get to Ueda? — Sure. Take the next yellow train to Hata, and change trains there. (第3学年)

これに対し、「情報を伝える」では、扱う題材を変え、言語活動も学年を追ってより発展的なものを織り込んでいる。事例4から事例6は、それぞれ第1学年から第3学年までの、共通する言語機能 Describing, Reporting を扱った部分である。

#### 事例4 「情報を伝える」(第1学年)

言語活動：自分の学校のホームページにのせる情報を整理して書く。

練習問題：

Step 1 例にならって、あなたの学校のホームページにのせる情報をメモにしよう。

(例) 学校名	Asahi Junior High
学校のある都道府県	Iwate
創立…年	50 years old
現在の生徒数	about 300 students
教員数	16 teachers

Step 2 Step 1 の例をもとに、イラストの空欄を埋めて朝日中学校のホームページを完成しよう。

(ホームページのイラスト)

Welcome to Asahi Junior High!

Our school is in \_\_\_\_\_, Japan. It's  
\_\_\_\_\_ years old. We have about \_\_\_\_\_  
and \_\_\_\_\_.

We enjoy many things at school. This  
is a picture of Sports Day.

Step 3 Step 1 で作ったメモをもとに、Step 2 の朝日中学校の例を参考にして、あなたの学校のホームページを書いてみよう。

Option 例にならって、学校行事を紹介する文を書いてみよう。(グループワーク)

(例) This is a picture of Volunteer Day. We clean the town  
on Volunteer Day. It's not easy.

(*NEW HORIZON English Course 1*. 平成10年度版. 東京書籍)

事例4では、Step 1 から Option までが段階的連続性をもった言語活動となっている。すなわち、Step 1、Step 2 は Step 3 につながる準備段階としての役割を果たしている。この点が、トピックの関連性がない文法練習が最初に置かれる傾向のある旧版の第1学年用と比較した場合、変化が認められる部分であると言える。またこのような活動を保証するために、ここでは学校行事の和英対訳の語句リストが与えられている。

事例5 「情報を伝える」(第2学年)

場面 1 : 目的を尋ねる質問に答える (コンピュータを使う理由を尋ねられて)

モデル文 :

Do you use a computer? Why? — I use a computer to play games.

練習問題 : ①ボブとお母さんの対話を聞いて、ボブが早起きする正しい理由を選ぶ。

②空所に to 不定詞を補い完成した文を発音する。

場面 2 : 建の家に遊びに来たデミ (自分のしたいことについて対話する)

モデル文 :

Ken: I want to get a computer.

Demi: Why? To surf the Internet?

Ken: Yes. I want to learn about people around the world.

練習問題 : ①例にならって、「食べたいもの」について話し合う。

(例) Bob: What do you want to eat for dinner?

Emi: I want to eat sushi.

②例にならって相手の答えを発表する。

(例) Bob: Emi wants to eat sushi

場面 3 : インターネットで質問する。メールで返事を出す。

Reading :

韓国の中学生からの英文メールと、シンガポールの中学生の

返信メールを読み、内容理解の英問英答を行う。

言語活動：インターネットで海外の国の相手と英語で情報を伝えあう。

①インターネットで質問しよう。

空所に自分のことや相手への質問を入れて完成し、発表する。

②メールで返事を出そう。

空所に語句や文を入れて返信メールを完成し、発表する。

(英文メールの例)

Hi, 相手の名前! My name is 名前. I'm 年齢  
and I live in 国名.

We start to study English in 中学1年生. English is  
やさしい/難しい for me.

Is it やさしい/難しい for you, too?

I hope to hear from you soon.

(*NEW HORIZON English Course 2*. 平成10年度版. 東京書籍)

事例5は、教科書の比較的初めの方に登場する単元である。文法事項は to 不定詞であり、二種類の用法が場面1と2で紹介される。旧版と比較して特徴的なのは場面3の構成であり、本文の内容は、前の場面との文法的関連性だけでなく、トピックの関連性が保たれていることが分かる（場面3の不定詞を含む表現は、In Korea we start to study English in the third grade. と We use English to study most subjects. となっている）。さらに、Reading の後で行う内容理解からメールを書いて発表するまでの練習問題は、文型そのもののドリルではなく、自分のことを伝えたり相手に質問したりする、情報のやりとりを中心に行わせている。このような構成により、「説明する」「報告する」という言語活動を各場面のつながりの中で段階的に行わせることが可能となる。

## 事例6 「情報を伝える」(第3学年)

場面 1 : 市役所の市民意見箱の提案 (現在完了形で書かれた英文を読む)

モデル文 :

I have lived in Heiwa City for five years. Since I came here, I have seen many nice things in the trash. I think Heiwa needs a recycling market.

練習問題 : ①スーのスピーチを聞いて、彼女について正しい記述を選択する。

②①で聞き取った情報をもとに、現在完了形の文を作って発音する。

---

場面 2 : リサイクルマーケットに参加するマークと由美

モデル文 :

Mark: Are you taking those CDs to the Recycling Market?

Yumi: Yes. And this sweater, too.

Mark: That sweater? It looks brand-new. How long have you had it?

Yumi: I've had it for two years.

練習問題 : ①ミカについて、ペアになって対話をしよう。一人が( )の数字を決め、もう一人がHow long...? を使って尋ねよう。

(ミカについて)

- ・カナダに在住
- ・カナダに( )年間住んでいる
- ・英語を( )年間勉強している



場面 3：リサイクルマーケットをテレビ中継する記者。来場者の一人にインタビューをする。

Reading：

リサイクルマーケットの様子をテレビで伝えている記者のレポートを読む。次に、来場者の建に何を買ったのかインタビューしている対話を読む。内容理解の英問英答を行う。

言語活動 1：メモにもとづいて新聞記事を書く。

- ①記者の取材メモにもとづいて空所に語を入れ、リサイクルマーケットの記事を完成し、発表する。
- ②自分が住む地域で最近あった行事について、記事を書いてみる。

言語活動 2：ペアで記者と来場者を演じ、インタビューを行う。

- ①場面 3 の記者とリサイクルマーケットの来場者の対話にならって、インタビューを演じる（文法的な重点項目はなし）

言語活動 3：テレビ中継を聞いて要点をメモする。記者のインタビューを聞いて、要点をメモする。自分が記者になったつもりで質問を考える。

- Step 1 テレビの実況中継を聞いて、「場所」と「みんながならんでいる理由」をメモする。
- Step 2 ならんでいる一人の女性へのインタビューを聞いて、「ならび始めた時刻」と「大好きなのはだれ？」をメモする。
- Option 自分がその女性にインタビューするとして、どのようなことを尋ねたいか考える。

(NEW HORIZON English Course 3. 平成10年度版. 東京書籍)

事例6は、事例4、5と同じ「説明する」「報告する」言語活動を中心とする。場面は、1、2年生で扱ったインターネット上のメールのやりとりから離れて、テレビのレポーターになって取材とインタビューを行う、という設定である。単元の構成は、事例5と共通している。Readingの内容に関する質問には、答えがはっきりしている形式の問い（yes/no 疑問、wh-疑問）が採用され、使用言語は英語である。このような質問を配置する意図として、難易度の低い形式の問いを用いながら学習者のアウトプット（目標言語を使用すること）を促すという点を挙げることができるであろう。日本語による発問（学習者自身の意見や考えを求める問い）は、この sequence の最後に日本語で置かれている（言語活動3の Option）。一方旧版の同じ Reading に相当する部分には、日本語による発問が単独で採用されていた。

以上のことから、事例6のような練習問題の配列には、中学校の最終学年ということで、上級レベルにつながる要素が加えられていると見ることができる。

## 8. おわりに

本稿では、平成10年に告示された新指導要領に基づく、改訂版の中学英語教科書を使用して、言語活動の部分に焦点を当てた教材研究を行った。従来文法事項の学習を基本としていた第1学年用の練習問題について、改訂版では同じ発行元の旧版と比較してどのように変化しているか、という点が分析の中心である。方法としては、Nunan(1989)の「練習問題の段階的配列」(graded sequence of exercises)の枠組みを用いた。

さらに、第1学年から第3学年に共通するコミュニケーション機能を扱った単元を分析し、学年が進むにつれて、言語活動がどのように変化しているかについて考察を行った。

その結果、文法事項の学習と定着のための基礎的言語活動と、獲得した言語知識を実際の場面で使用する創造的言語活動とを組み合わせた配列は、第1学年用の練習問題にも見られることが分かった。また、3つの学年を通して共通するコミュニケーション機能を扱った改訂版の例では、言語構造の複雑性（表

現の幅)だけでなく、タスクの複雑性(言語活動の幅)に変化が見られ、上級レベルにつながる発展的要素が加えられていることが、一部に確認された。

以上のようなことから、これからの新しい教科書の方向としては、文法シラバスを残しながら、そこに機能的な要素を学習段階に応じて組み込むことが必要となろう。今後の課題として、公教育において教科書の果たす役割について、さらに考えていきたい。

#### (注)

1. 特定の目的を達成するために行う作業や活動をタスクと呼ぶ。効果的なタスクは、到達点(goal)が明確であり、作業の遂行のために情報交換が必要である、という特徴を持つ。(白畑知彦他『英語教育用語辞典』)
2. 文部省(1999)『中学校学習指導要領解説：外国語編』東京書籍, 25-30.
3. シラバスタイプには、文法を中心とした文法・構造シラバス(structural syllabus)、「時間」「空間」などを表す概念と「願望」「感謝」「依頼」などを表す機能を中心とした概念・機能シラバス(functional-notional syllabus)など、さまざまなシラバスタイプがある。(K. ジョンソン、H. ジョンソン編『外国語教育学大辞典』)
4. 新指導要領の告示年度にしたがって、このように指示することとする。
5. David Nunan, *Designing Tasks for the Communicative Classroom* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989) 118-19.

#### [参考文献]

- Finocchiaro, Mary, and Christopher Brumfit(1983) *The Functional-Notional Approach: From Theory to Practice*. New York: Oxford University Press.
- Nunan, D.(1989) *Designing Tasks for the Communicative Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

Savignon, Sandra J.(1983) *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice*. Reading, MA: Addison-Wesley Publishing Company.

Widdowson, H. G., and C. J. Brumfit (1981) "Issues in second language syllabus design." In J. E. Alatis, et al. (eds.) *The Second Language Classroom: Directions for the 1980's*. New York: Oxford University Press.

田崎清忠（編）（1995）『現代英語教授法総覧』大修館書店.

新里眞男（他）「中学校英語教科書大解剖」『英語教育』10月号2001.

望月昭彦（編著）（2001）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店.

文部省（1999）『中学校学習指導要領解説：外国語編』東京書籍.

和田稔（1997）『日本における英語教育の研究：学習指導要領の理論と実践』桐原書店.

#### [使用教科書]

*NEW HORIZON English Course 1, 2, 3*. 東京書籍, 2000.

*NEW HORIZON English Course 1, 2, 3*. 東京書籍, 2002.